

修士論文（要旨）  
2012年1月

在日インド人ニューカマー女性の複言語意識の考察  
—越境とアイデンティティ構築に着目して—

指導 宮副 ウォン 裕子 教授

言語教育研究科  
日本語教育専攻  
210J3002  
亀澤 敦子

## 目次

### 第1章 はじめに

1.1 研究の背景	1
1.2 在日インド人ニューカマーについて	2
1.2.1 神奈川県下のコミュニティについて	2
1.2.2 在日インド人ニューカマー女性について	4
1.3 研究の目的	5

### 第2章 先行研究

2.1 複言語・複文化主義	6
2.2 アイデンティティ	10
2.3 本研究の立場	13

### 第3章 調査概要と分析方法

3.1 調査概要	14
3.1.1 調査協力者	14
3.1.2 調査方法	15
3.2 分析方法	16

### 第4章 記述分析

4.1 分析コード概観	18
4.2 コード別記述分析	20
4.2.1 「生まれ育った複言語環境」	20
4.2.2 「自己の複言語能力への意識」	24
4.2.3 「インドにおける高い英語の地位」	26
4.2.4 「越境時の英語の役割」	27
4.2.5 「越境後の複言語生活」	29
4.2.6 「社会参加を阻む言葉の壁」	31
4.2.7 「多様な日本語学習の目的」	34
4.3 コード別分析のまとめ	35

### 第5章 総合的考察

5.1 複言語意識	37
5.2 越境と複言語意識	38
5.3 アイデンティティ構築	40

### 第6章 おわりに

6.1 本研究で明らかになったこと	42
6.2 本研究の意義	43
6.3 本研究の限界と今後の課題	44

参考文献

巻末資料

近年、経済のグローバル化の下、国境を越えた人の移動が増加しており、世界3大移民の一つのインド系移民においても、IT産業に従事するインド人の先進国への移動が増加している。日本においても、1990年代以降IT技術者とその家族からなる新しいインド人コミュニティ（ニューカマー）が首都圏に出現した(澤 2004, 澤・南埜 2009 など)。稿者は2009年末より川崎市の日本語学習支援教室において、ニューカマー女性達の支援に携わってきた。ニューカマー女性を対象とした小山田(2007)などの先行研究では、日本語の壁に阻まれた孤独な姿ばかりが指摘されてきたが、稿者が出会ってきた女性達は、複数の言語リソースを用いて日本社会の中で多様な生き方をしていた。複数の言語能力を有する彼女達が、言語間・文化間の越境の中でどのような言語世界に生きているのか興味を抱き、これが本研究の出発点となった。本稿は、言語間・文化間の越境体験の中で生きる彼女達の言語世界を明らかにすることで、人が国・文化・言語の境を越えて生きる機会が増大する現代で、複言語主義がどのような可能性を持っているのかを考察することを目的とした。

複言語主義は、言語間・文化間の増加を受け、2001年欧州評議会がヨーロッパにおける多様性の中の統一を目指して提唱した概念である。西山(2010)によれば、複言語主義の世界は、異質なものが不均衡な関係を保ちながら混在している、複層的で流動的な言語世界である。複言語主義は、他者との相互理解を促進する役割やアイデンティティ構築要素としての言語の側面に焦点を当てる「価値としての複言語主義」という側面と、コミュニケーション遂行のため文脈に応じ個人の持つ言語体験や知識を柔軟に使用することのできる能力、即ち「能力としての複言語主義」という二つの側面を持つ。本稿で用いる複言語意識は、この二つの側面を含む個人の意識である。

近年、複言語主義的視点から、個人の複数の言語使用・知識・体験・意識および言語能力を扱った様々な実証的研究が行われ、複言語意識とアイデンティティ構築の密接な関わりが示唆された(福島 2009, 村田 2009 など)。アイデンティティは、世界的な人の移動の増加を受け、自己の内で統合化されていく一元的なものと捉える従来の本質主義的な立場から、流動的かつ複合的で実践的なものと捉え、社会的な文脈を重視する構築主義的な立場が新たに支持されてきた(箕浦 1995, 保坂 2010 など)。この流れを受け、羽鳥(江頭)(2011:21-22)は、「権力関係の中で行われる言語・言語実践によって位置づけられる自己や他者であり、流動的で不安定、複雑なアイデンティティを指すポスト構造主義的概念」と定義し「複合アイデンティティ<sup>1</sup>」を提唱した。境自体が流動性を持つ複文化・複言語の時代において、「複合アイデンティティ」は妥当性が高いと考え、本稿は、羽鳥(江頭)(前掲書)を支持し、アイデンティティ構築を複合的で流動的かつ実践的なものとして捉えた。

本稿においては、調査方法として、川崎市の日本語学習支援教室に在籍している3名のニューカマー女性を対象に半構造化インタビュー(村岡 2002)を行った。来日後の生活を中心に言語生活や越境体験や異文化体験などについて語ってもらった。インタビューデータは文字化し、箕浦(2009)の「分析カテゴリー」を用い、「オープンコード」と「軸足コード」の二段階でコードを生成した後エスノグラフィックな記述分析を行い結果をまとめた。

分析の結果、「軸足コード」として7項目が(以下【 】で記す)、その下位概念である「オープンコード」として25項目が生成された。【生まれ育った複言語環境】では、調査

---

<sup>1</sup> Butler(1990)の概念とそれを日本語研究に援用したマリィ(2007)に依拠する。マリィ(前掲書)は、この概念の特徴であるアイデンティティの重層性、流動性、複雑性を表すために「複合アイデンティティ」と命名した(羽鳥(江頭)2009)。

協力者らは母国インドにおいて複言語環境で生まれ育ち、無意識に複言語能力を培い、母語への意識や子どもの言語教育の意識を形作っていることがわかった。【自己の複言語能力への意識】では、双方が複数の様々なレベルの言語リソースを動員し遂行するという複言語主義的なコミュニケーション観が明らかとなった。【インドにおける高い英語の地位】では、インドにおいては英語力が社会経済的な成功のキーとなってきたというマクロな要素が、ミクロな個人の複言語意識に影響を及ぼすことがわかった。【越境後の英語の役割】では、海外生活における「世界共通語」としての英語の地位の高さが浮き彫りとなり、英語のできない他国人への批判意識も明らかとなった。【越境後の複言語使用】では、低い日本語能力を複言語能力で補完し社会参加をする姿勢がうかがえた。一方【社会参加を阻む言葉の壁】においては、就労や人的ネットワークを阻害する要素として確かに言語の壁が存在していることが確認された。【多様な日本語学習の目的】では、社会参加のためだけでなく娯楽として日本語を学習する選択的学習者としての姿も浮き彫りとなった。

総合的な考察の結果、調査協力者らは、言語間の越境によって生じる様々な境界線間でのせめぎ合いや社会的文脈の制約の転換による社会参加の困難を経験していることがわかった。さらに、調査協力者らはその困難や葛藤を乗り越えるために、複言語使用を通し豊かなアイデンティティ構築を遂行し自らをエンパワーすることで、社会参加に取り組んでいる姿勢が明らかとなった。

## 参考文献

- 小山田基香(2007)「西葛西におけるインド人コミュニティ - IT 技術者家族へのインタビューを中心として -」『社会学研究科年報 No.14』立教大学大学院社会学研究科.
- 澤宗則(2004)「グローバリゼーション下のディアスポラ - 在日インド人のネットワークとコミュニティ -」科研報告書.
- 澤宗則・南埜猛(2009)「グローバルシティ・東京におけるインド人集住地の形成 - 東京都江戸川区西葛西を事例に」庄司博史編『移民とともに変わる地域と国家』国立民族学博物館調査報告.
- 西山教行(2010)「序 複言語・複文化主義の受容と展望」細川英雄・西山教行『リテラシーズ叢書1 複言語・複文化主義とは何か - ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』くろしお出版. v - ix.
- 羽鳥(江頭)玲子(2009)「複合アイデンティティと日本語教育研究」『WEB 版リテラシーズ』6(2)くろしお出版. 21 - 26.
- 福島青史(2009)「多言語使用者の言語選択とアイデンティティ - 多言語状況の「複言語主義」的記述から -」『ヨーロッパ日本語教育』(13).
- 保坂裕子(2000)「多声的時空間におけるアイデンティティ構築：アイデンティティ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性について」『京都大学大学院教育学研究科紀要』46. 425-437.
- マリィ、クレア(2007)『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション (切り抜け・交渉・談判・掛け合い) 行為の研究』ひつじ書房.
- 箕浦康子(1995)「異文化接触の下でのアイデンティティ 理論枠組み構築の試み」『異文化間教育』9(4)異文化間教育学会. 19 - 35
- 箕浦康子編著(2009)『フィールドワークの技法と実際Ⅱ - 分析・解釈編 -』ミネルヴァ書房.
- 村岡英裕(2002)「2 - 8 質問調査：インタビューとアンケート」J.V.ネウストプニー・宮崎里司編『言語研究の方法 - 言語学・日本語学・日本語教育額に携わる人のために』くろしお出版. 125 - 142.
- 村田晶子(2009)「実践共同体における複文化・複言語主義 - 大学院研究室と企業の談話の分析から複文化・複言語主義の可能性を探る -」『リテラシーズ研究集会 2009 複言語・複文化主義と言語教育予稿集』 20 - 21.
- Butler, J.(1990). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. New York, NY:Routledge. (バトラー,J.(1999)竹村和子訳『ジェンダー・トラブル - フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青士社.
- Coste, D., Moore, D., et Zarate, G.(1997). *Compétence plurilingue et pluriculturelle: Vers un Cadre Européen Commun de référence pour l'enseignement et l'apprentissage des langues vivantes. Études préparatoires*. 70. Strasbourg:Éditions du Conseil de l'Europe.